

滋賀県立大学 研究シーズ集 2024 の発刊にあたり

本学は文系から理系まで幅広い学問分野について4学部13学科と全学附属施設等を有し、そこでは約200名の教員が各々の専門分野に取り組んでいます。地域人材の育成や地域課題の解決に向けた取組、産学官連携を強化し、地域貢献のリーディングモデルとなることは本学の目標の一つです。この目標を達成するために、本学産学連携センターは地域と大学を結ぶ窓口として、地域連携や産官学連携の推進のために活動しています。

この研究シーズ集は、教員の研究活動やその成果、研究者が持つ知識や技術をわかりやすく紹介することで、地域や産業界の皆様にご覧いただき、広く活用していただくことを目的として、2005年度から発刊しています。

このたび作成した「研究シーズ集 2024」には、2022年版から18名の内容を追加した145名の教員を掲載しています。技術相談や共同研究、受託研究の「シーズ」として、更にはリカレント教育やリスキリングの講師選びや採用活動の資料としてもご利用ください。

本シーズ集が、イノベーションの創出や地域社会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

なお、このシーズ集は当センターのホームページにも掲載いたします。本学の研究シーズに興味を持っていただいた皆様には、お気軽に当センターまでご連絡いただきご相談くださいますよう、お願いいたします。

2024年 8月

公立大学法人滋賀県立大学
産学連携センター長 松岡 純

〈研究シーズ〉 目次

| 学部学科等 | 職名 | 氏名 | タイトル | ページ | |
|------------------------|--------|---------------------------------|--|--|-----|
| 人間看護学部 | 人間看護学科 | 教授 | 伊丹 君和 | 看護・介護者の腰痛予防教育システムの開発および地域住民の健康生活支援 | 117 |
| | | 教授 | 越山 雅文 | 超音波を使ったヒト下肢浮腫定量測定装置の開発 | 118 |
| | | 教授 | 坪井 宏仁 | 健康寿命延伸における、こころとからだのWell-being実現 | 119 |
| | | 准教授 | 米田 照美 | 看護者の危険認知と医療安全教育 ～すべての人々に安全な医療・看護の提供を目指して～ | 120 |
| | | 講師 | 関 恵子 | 触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援 | 121 |
| | | 講師 | 千田 美紀子 | 看護従事者育成に関する研究 | 122 |
| | | 教授 | 古株 ひろみ | 子どもの気持ちに寄り添う | 123 |
| | | 教授 | 千葉 陽子 | 妊婦や子育て中の母親のストレスに関する研究 | 124 |
| | | 准教授 | 板谷 裕美 | サステナブルな月経用品の普及に貢献する | 125 |
| | | 准教授 | 川端 智子 | 小・中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育 | 126 |
| | | 講師 | 玉川 あゆみ | 自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に 進めるためのケアガイドの開発 | 127 |
| | | 講師 | 松原 千晴 | フェムテックを活用した就労女性の健康支援に関する研究 | 128 |
| | | 講師 | 渡邊 友美子 | 産後の母子への支援に関する研究 | 129 |
| | | 教授 | 岡本 紀子 | 地域在住高齢者の肺炎予防 | 130 |
| | | 准教授 | 荒川 千登世 | 続発性リンパ浮腫のセルフケア継続支援 | 131 |
| | | 講師 | 岡崎 瑞生 | 健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み | 132 |
| | | 講師 | 片山 将宏 | 脳卒中サバイバーのセルフマネジメント尺度の開発 | 133 |
| | | 講師 | 松井 宏樹 | フレイル状態にある高齢者への意思決定支援 | 134 |
| | | 教授 | 新井 香奈子 | 地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性 | 135 |
| | | 教授 | 牧野 耕次 | 対人援助関係におけるインボルブメント | 136 |
| 准教授 | 川田 陽子 | 精神科長期入院患者の退院支援に関する継続教育 | 137 | | |
| 准教授 | 小林 孝子 | 自閉スペクトラム症のある女性が安心して子どもを育てるための支援 | 138 | | |
| 講師 | 川口 恭子 | ひきこもり状態にある人と家族への支援 | 139 | | |
| 講師 | 國丸 周平 | がん患者への意思決定支援 | 140 | | |
| 全学共通教育推進機構 | 准教授 | 坂本 輝世 | 対話としての英語表現力の育成—言語使用者としての発達を目指して— | 141 | |
| | 講師 | サンフォ ジャンパティスト | Factors of Rural-Urban Learning Achievement Inequalities in Francophone Sub-Saharan African Primary Education. | 142 | |
| 地域共生センター | 教授 | 鶴飼 修 | 地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援 ～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～ | 143 | |
| | 講師 | 上田 洋平 | 「あたりまえのくらし」と「無事の文化」を守る まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成 | 144 | |
| 地域ひと・モノ・未来 情報研究センター | 准教授 | 杉山 裕介 | 物理現象を記述する偏微分方程式の数学解析 | 145 | |

〈研究者別 研究分野・キーワード一覧〉

146-149

※ SDG s 目標別の研究シーズ：次頁からのSDG s 目次を参照してください。



看護・介護者の腰痛予防教育システムの開発 および地域住民の健康生活支援

関連するSDGsの国際目標

3 すべての人に健康と福祉を



4 質の高い教育をみんなに



人間看護学部 人間看護学科 教授 伊丹 君和

研究分野 : 基礎看護技術、教育学

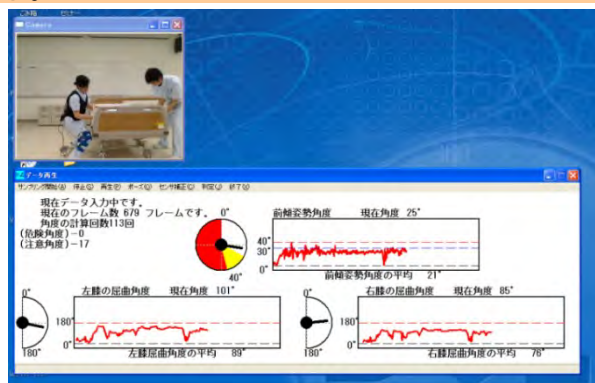
研究室HP : [滋賀県立大学人間看護学部 基礎看護学領域 \(usp.ac.jp\)](http://usp.ac.jp)

①看護者および介護者の職業性腰痛は深刻であり、離職者防止の観点からも腰痛対策は急務である。看護動作における腰痛発症の要因として上体を前屈させる前傾姿勢やひねり姿勢などがあげられるが、まず自己の看護動作時における危険姿勢を自覚することが、改善への糸口と考えている。そこで、動作時の前傾姿勢角度を自己チェックし、腰部負担計測が可能な機器開発を工学部および(株)村田製作所と進め、現在は青山学院大学や明治大学理工学部などと腰痛予防教育管理システムの開発に取り組んでいる。本システムの普及によって、さまざまな職種の腰痛予防対策に貢献することが期待される。

②地域住民の健康教育および健康生活支援を目的に、近江楽座のプロジェクトチーム『未来看護塾』とともに活動し、支援している。

■腰部負担域を「音」でリアルタイム体感可能な機能搭載

看護動作時に腰部にかかる関節モーメントの算出などから危険角度を40° 注意角度を30°と定めた。また、視覚だけでなく聴覚からもリアルタイムに自己のボディメカニクス活用状況を認知させることが効果的と考え、危険角度および注意角度における音発生機能を搭載した。すなわち、動作時にリアルタイムで自己の前傾角度の度合いを認識できるように、前傾角度に応じてコンピュータ内蔵スピーカーから2種類の警告音を出力する仕組みである。*工学部との共同開発



■携帯型 姿勢評価用スマートデバイス

看護・介護者の職業性腰痛の改善に役立てるために開発した。看護・介護業務時に本デバイスを胸ポケットに装着することで、業務中の前傾姿勢・ひねり姿勢の計測・数値化が可能となる。また、同時に警告することも可能である。今後の展望として、適切なフィードバック方法の検討、また上体角度以外の腰部負荷への影響因子と考えられる生体データを計測できるように改良し、有効性を向上させていく必要がある。

* 青山学院大学、明治大学理工学部、(株)メディアロボテックとの共同開発

■地域住民の健康生活支援

地域住民の健康教育および健康生活支援のため、滋賀県が推進する「健康しが」と協賛し活動するとともに、「未来看護塾」の学生とともに地域各所で健康教育および健康支援活動を行っている。

「未来看護塾」の紹介動画→



<特許・共同研究等の状況>

①本学工学部機械システム学科、(株)村田製作所、彦根市立病院との共同研究(特許:腰部疲労判定方法、ソフトウェアおよび腰部疲労判定装置 特願 2016-11857など)現在、明治大学理工学部、(株)メディアロボテックと共同研究

超音波を使ったヒト下肢浮腫定量測定装置の開発

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 越山 雅文

研究分野 : 浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防

浮腫は生理的にも病的にも生じる。臨床現場では、浮腫程度を診断するのに指で下肢を押し、圧痕を観察する手法がとられている。当研究室では、医療現場で簡易に使用できる超音波浮腫定量装置の開発を研究している。

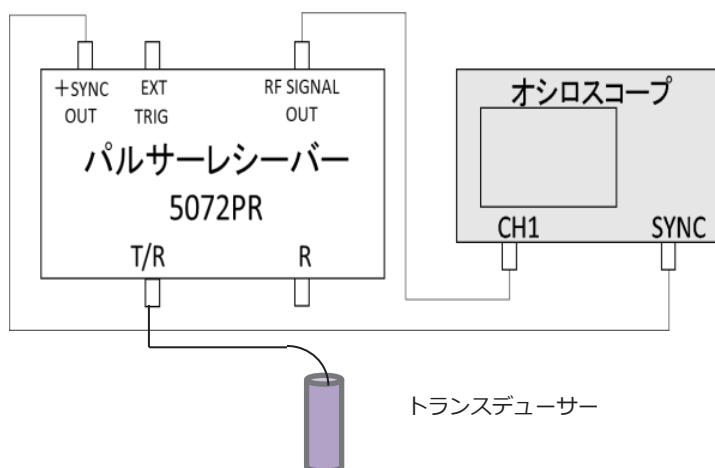
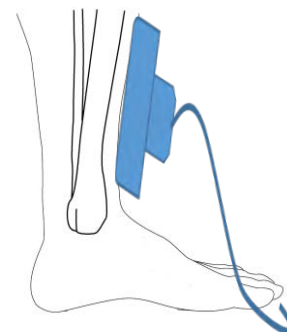
■超音波画像診断装置を使ったヒト下肢浮腫の測定

妊娠後期の妊婦では、生理的にも病的にも浮腫をきたす場合が多い。我々は、携帯型超音波画像診断装置を使って妊娠中期から後期にかけて下肢浮腫をきたした妊婦ときたさなかった妊婦の2群で、それぞれの下肢皮膚厚（表皮～皮下組織）を測定した（右図）。全98足の測定結果では、浮腫群の皮膚厚は $6.4 \pm 0.3\text{mm}$ であったのに対し、非浮腫群では $4.6 \pm 0.4\text{mm}$ ($p=0.0001$)と有意な差が得られた。カットオフ値は 4.7mm と計算できたが、感度が83.9%、特異度が66.7%、正確度が77.6%に留まった。浮腫が無くても、元々脂肪の多い肥満群では皮膚厚が大きく算出される傾向にあった。この皮膚厚測定は、浮腫ありと分かっているヒトの治療効果判定には有用だが、初回の浮腫診断では若干の問題点を含むと考えられた。



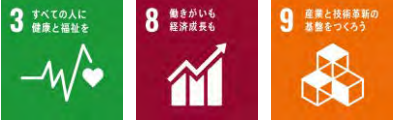
■組織内超音波通過速度測定による水分量算出

肥満の有無に関わらず、一回の測定で皮膚組織の水分量を正確に測定できる装置の開発が必要と考えた。現在は、工学部との共同研究にて、下図に示すようなパルサーレーザー、オシロスコープ、トランスデューサーを連結させた装置にて皮膚組織内の超音波通過速度を測定し、得られた数値から含有水分量を算出する研究を行っている。一度の操作で、定性と定量を同時に測定できる機器開発を目指している。



健康寿命延伸における、 こころとからだのWell-being実現

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 坪井 宏仁

研究分野: 心身医学、精神神経免疫学、国際保健

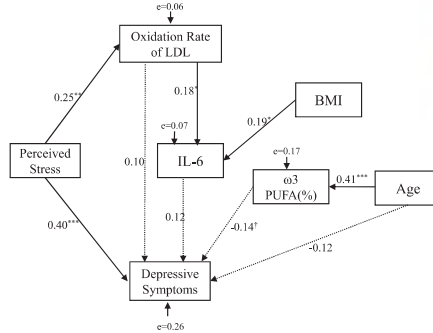
研究室HP: <https://researchmap.jp/pohjolainen/>

心-身の関連性は、科学的エビデンスが証明されてきています。抑うつ予防・幸福感の向上を、社会と末梢の抗酸化・抗炎症的側面から追求することを目標とします。

抑うつと慢性炎症

指標 $TNF\alpha$, $IL-6$, $IL-17$, $IL-10$,
 $NF-\kappa B$ 他, 各種SNPs

Tsuboi H, J Affect Dis 2019, Tsuboi H, Behav Sci 2018



メンタル不調

神経損傷

ブロック

炎症
酸化

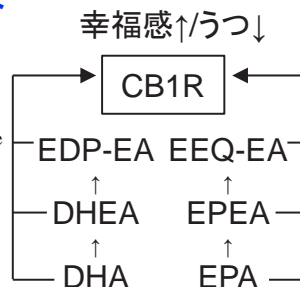
人間看護学部

栄養素の精神神経作用

内因性カンナビノイド

Tsuboi H, Nutrients 2020

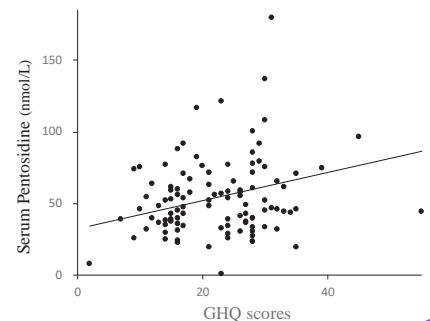
CB1R: cannabinoid receptor type 1
DHEA: docosahexaenoyl ethanolamine
EDP-EA: epoxydocosapentaenoic acid-ethanolamide
EPEA: eicosapentaenoyl ethanolamide
EEQ-EA: epoxyeicosatetraenoic acid-ethanolamide



精神的健康度と糖化

AGEs (Pentosidine など)

Tsuboi H, J Psychosom Res 2019



抑うつ評価

質問票CESD-R日本語版の作成

(CESD-R: the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale - Revised)

Tsuboi H, Behav Sci 2021

看護者の危険認知と医療安全教育

～すべての人々に安全な医療・看護の提供を目指して～

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 准教授 米田 照美

研究分野：医療安全 看護管理学 基礎看護学

研究室HP：<http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/>

人々が病や障害から健康を回復するため、看護者（医療者）として安全な医療・看護を提供することは最低限の責務です。そのためには、看護者が療養環境のリスクを認知する観察眼を持つことが求められます。看護者の観察眼を解明し、看護教育において優れた危険認知力をもつ看護者の育成に貢献したいと考えています。

1. 看護者の危険認知に関する観察眼の解明

医療事故を未然に防ぐためには、看護者が素早く危険を認知する技能が重要です。下記の眼球運動測定機器を用いて、看護師の優れた危険認知の特徴を学生との比較によって明らかにする研究を行っています。観察場面として「高齢者の車椅子やポータブルトイレへの移乗」「歩行」「小児患者のベッド周辺環境」など療養環境の場面を取り上げて看護者の注視や視線の軌跡を計測しています。

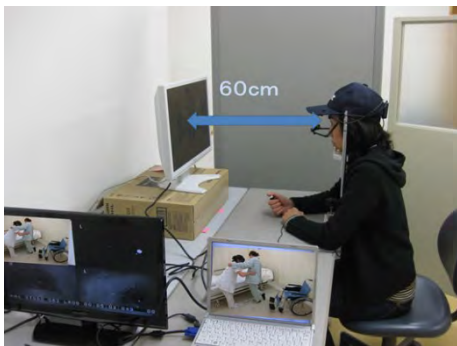


図1. 眼球運動計測の状況

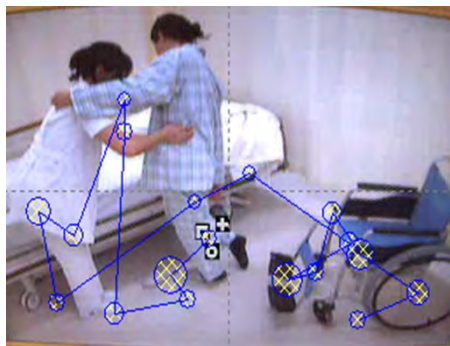


図2. 車椅子移乗観察時の視線分析



図3. ベッドサイド観察時の視線分析

(写真の○は注視時間の長さ、線は注視の軌跡を表す)

2. 医療事故模擬体験演習の開発・実施・評価

看護学生を対象に医療事故に関わる危険認知の向上を目指した医療事故模擬体験やシミュレーション教育を実施し、その学習効果を検証しています。医療事故をよりリアルに再現するために模擬患者役はスタントマンが演じています。



図4. 医療事故再現劇の様子



図5. グループで車椅子移乗体験



図6. 車椅子移乗体験の様子

触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援



人間看護学部 人間看護学科 講師 関 恵子
 研究分野 : 基礎看護技術、医療福祉工学
 研究室HP : <http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/>

- ①触れるケア“マッサージ教育”として、大学の基礎看護技術学やホリスティックケア論でマッサージ教育を行っています。そして、地域の住民の方々や病院で活動を行う、看護ボランティア“未来看護塾”で看護学生が実施するハンドマッサージの実技指導を担当しています。
- ②看護学生および視覚障害のあるあん摩マッサージ指圧師養成学校の学生や有資格者を対象とした手技教育支援システムを工学部と医療教育システム開発企業と共同制作を行っています。
- ③看護師の腰痛者経験者は非常に多く、腰痛により仕事だけでなく私生活にも影響を及ぼします。看護職者が、仕事でも私生活でもいきいきと過ごせる体づくりを行うための研究を彦根市内の病院の協力を受け、腰痛緩和ケアに関する就業支援に向けた介入研究を実施しています。

■看護教育におけるマッサージ手技学習システムの開発

あん摩マッサージ指圧師の資格を生かし、看護教育・地域健康支援で看護マッサージを行っています。マッサージは、受ける側の心地よさだけでなく、心身への効果を見える化し、マッサージの心地よさを定量化することが安全で安楽な看護実践を行う上で重要です。そのため、学習システム開発を本学の工学部機械システム科の西岡講師と行っています。

■腰痛のある看護職者の就業支援に関する研究

看護師の看護援助を行う上で、腰に負担のある患者の持ち上げ動作をなくす取り組みは積極的に行われています。しかし、寝たきり患者さんの看護の場合、清拭や排泄、食事の援助で中腰姿勢といった腰痛の原因となる動作が多く存在します。

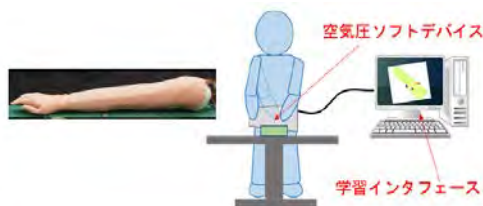
研究では、腰痛原因動作による腰の負担“筋肉の疲労”を改善するための血行促進作用のあるマッサージによる就業支援研究を実施しています。



■視覚障害者を対象とした手技教育支援システムの開発

視覚障害のある人々の主要な職業としてあん摩マッサージ指圧師業があります。しかし、所得は同じ資格を持つ晴眼者の半分以下であり、職業的地位も低いことが問題となっています。その原因として、視覚データが得られない状況での手技習得の難しさが挙げられます。

現在、手技教育支援システムを、本学の工学部機械システム科の西岡講師と共同開発しています。この開発では、県内の視覚障害者センター、県立盲学校、医療教育システム開発企業と連携し取り組んでいます。



看護従事者育成に関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 千田 美紀子

研究分野 : 基礎看護学 看護教育

近年、高齢社会になっていく社会の中で医療に対する安全・安心の意識は高まっており、質の高い医療ケアの提供が求められています。ケアを受ける中でも、その人らしい生活が送れるように支援することが看護職者に求められており、看護学教育にとって重要になると考えます。その実践能力が育つように、看護技術に関する教育方法の検討や、学生一人一人の個別性に沿った支援に関する研究を行っています。

■看護ケアの技術習得するための教育方法の検討

- 看護学教育の中で、看護ケアの技術習得は必要不可欠なものです。看護ケア技術には、食べる、寝る、動く、息をする、身なりを整える、身体を清潔に保つなど、生きていくために必要な動作の援助があります。それらの技術が実践できるようになるには、知識・技術・態度を身につける必要があります。現在の教育では、まず技術に必要な知識を「講義」で学び、技術・態度は、学校内で学生同士で実践し合う「演習」を行い、「実習」を通して病院などの現場で実践することで習得しています。



その教育の中でも「演習」に着目し、技術を習得するためにはどのようなことが影響するのか、効果的に学ぶための方法を検討しています。また、技術教育の中で腰痛予防に関する検証も行っています。

■発達障害の特性をもつ学生への支援

- 近年、「発達障害」という言葉を耳にすることが増えたと思います。発達障害とは、生まれつき脳の発達がアンバランスであり、ある特定分野の勉強が苦手、コミュニケーションが苦手、こだわりが強い、落ち着きがない、集中力が続かないなど、様々な特徴により日々の生活に困難を抱えている状態のことを指します。現在はそのような人が増加傾向にあり、学びやすい学習環境や働きやすい労働環境を作ることが求められています。その中でも特に看護では相手の気持ちに寄り添うことが大切であり、職業選択をする上でコミュニケーション能力が必要とされます。コミュニケーション技術も学習により、身につけていくことが可能であるため、この特性個々に沿った支援を行うことで、困難が少しでも軽減できるような研究を行っています。

<研究ノート>

・「看護教育における病院実習に関する研究の動向分析と今後の課題」千田美紀子, 米田照美, 清水房枝, 伊丹君和 (人間看護学研究 (11) 45 ~ 52 2013年03月) 共著 共同 (主担当)

子どもの気持ちに寄り添う

関連するSDGsの国際目標



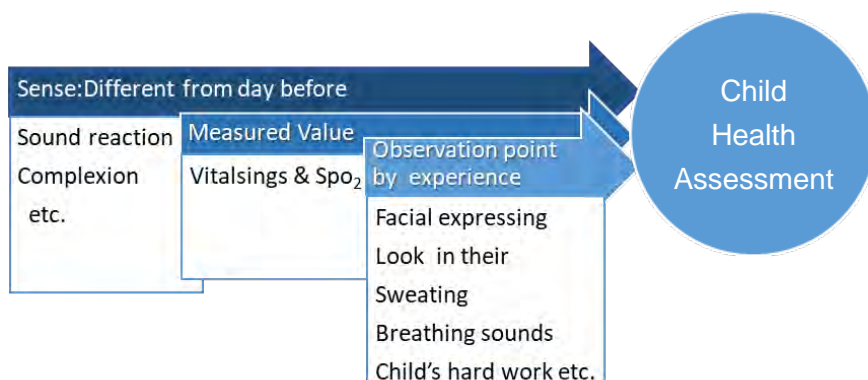
人間看護学部 人間看護学科 教授 古株 ひろみ
研究分野 : 小児看護、家族看護

子どもは、ことばでは十分に自分の気持ちや状況を表現することができません。そのため、子どもの気持ちや体調に寄り沿った支援や技術が必要と考えています。

■子どもの健康評価の共有化に関する研究

医療者の健康評価に至るプロセスについては経験や体験から感じとるいつもの違いがまず最初に察知されます。その後、客観的な数値で確認し、体調を維持するための対応が行われます。

誰もが共有できる健康評価指標の開発にむけて、経験や体験から感じ取る視点などについて体系的に可視化することを研究しています。



The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars

■処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減にむけた支援への研究

処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減のための支援について研究しています。また、その内容を小児看護教育においても教授し、実践に臨めるよう検討しています。

<論文>

•Awareness of Clinical Instructors Regarding Advocating for Children's Rights in Pediatric Nursing Training

(The 24th East Asian Forum of Nursing Scholars 2021年04月)

Rumi Ueno, Hiroko Kokabu, Chiyuki Ryugo, Tomoko Kawabata, Miki Hirata, Misa Suzuki, Ayumi Tamagawa

■小児看護学におけるシミュレーション学習の研究

子どもの状態を観察し、正しい判断やケアを提供できるためには、シミュレーション学習が有効だと考えています。知識・技術に加え、チームワークやコミュニケーション力などの包括的な実践力の修得を目指し、効果的なシミュレーション学習についての研究も開始しています。

妊婦や子育て中の母親のストレスに関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 千葉 陽子

研究分野 : 生涯発達看護学 助産学

少子化が進行する中、妊婦や子育て中の母親たちは様々なストレスを抱えて生活しています。こうした方々の現状を把握してストレスの可視化に取り組んだり、支援を探究したりしています。

■WITH・POSTコロナ時代に求められる妊娠期の健康教育・保健指導のあり方の探究

- ・ COVID-19パンデミックの影響により国内外で人々の移動・接触の制限が続く中、対面・接触を主軸としてきた医療・看護の領域でもオンラインによる非対面・遠隔での支援が急速に広がっていきました。周産期領域でも、医療機関や行政機関での業務に様々な制約が生じ、妊婦や母親たちの生活行動にも制限が課されるようになり、オンライン支援が導入されていきました。
- ・ こうした中、本研究では妊娠期の健康教育や保健指導に焦点を当てて、WITH・POSTコロナ時代に産科医療・地域母子保健分野で求められる支援のあり方、特に助産師や保健師ら医療専門職に真に求められている対面・接触での支援の本質を探究することを目指しています。

■生殖可能年齢の女性のライフイベントと尿中ストレスマーカーとの関連性

- ・ 酸化ストレスとは、活性酸素の産生が過剰となり抗酸化防御機構が崩れた状態のことです。一方、ヘムの代謝産物であるビリルビンは黄疸の原因物質ですが、強力な抗酸化作用があり、過剰な活性酸素と反応してバイオピリンとして尿中に排泄されます（塩地，2005；山口ら，2005；平井ら，2006；高橋，2019）。
- ・ そのため、非侵襲的採取が可能な尿中のバイオピリンを酸化ストレスマーカーとして評価する研究が行われており、バイオピリンは精神疾患（Miyaoaka et al., 2005）、敗血症（Otani et al., 2001）、心筋梗塞（Kunii et al., 2009）などの他、マラソン後（平井ら，2006）、スピーチに伴う精神的ストレス（Yamaguchi et al., 2002）などでも上昇することが報告されています。
- ・ 本研究では、非妊娠女性、妊婦、産後の母親らの尿中バイオピリン（urinary biopyrrin: UBP）を分析し、これらの人々のストレスを数値化して評価することに取り組んでいます。

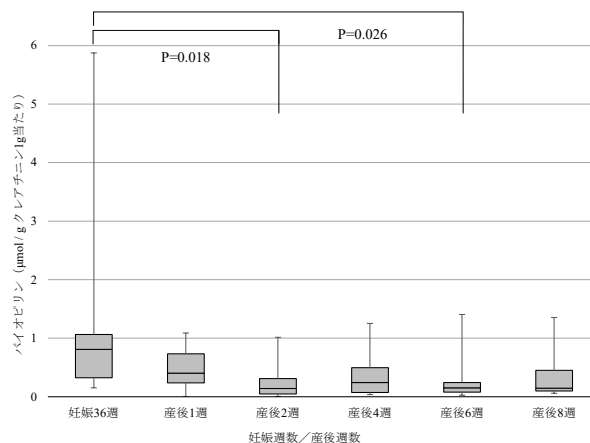


図1 尿中バイオピリン値の変動

各時期n=14, Friedman test: p=0.008

<共同研究の状況>

セルスペクト株式会社：生殖可能年齢の女性のライフイベントと尿中ストレスマーカーとの関連性

サステナブルな月経用品の普及に貢献する



人間看護学部 人間看護学科

准教授 板谷 裕美

研究分野：母性看護・助産学、ウィメンズヘルス、

助産ケア、母乳育児、助産師のキャリア発達支援

概要：月経年齢を迎えたすべての女性が、自分の月経管理に安全性・安楽性・快適性を求めることは、女性の基本的権利であるといえます。月経にまつわる健康と質の高い教育を享受し、ジェンダー平等（女性のエンパワーメント）の実現をめざす取り組みを、女性とのパートナーシップに基づいた助産実践の視点から考えていきます。

■日本人女性における月経カップの使用実態および普及に関する研究

月経カップ [Menstrual Cup] はサステナブルな月経用品の一つです。月経カップが日本国内の男女にどの程度認知され普及しているのか？月経カップの使用が、女性の生活の質や心理的ストレスにどのような影響を及ぼすのか？について研究しています。



→ 日本人助産師を対象に実施した当研究室の先行研究から、月経カップ使用に対する心理的抵抗感や不安といったネガティブイメージを減らす関わりが重要である事がわかっています (Table 1. 参照)。* すべての女性が個々のニーズに応じて、月経用品の一つに月経カップを選択できる情報提供と、思春期以降の月経教育の充実が重要であると考えています。

Table 1. 月経カップ使用後の感想

| | ポジティブフィードバック | ネガティブフィードバック |
|-------------------------|--|--------------|
| 月経カップ使用に伴う快感 | 月経を忘れるほどの快感(4) 紙ナプキン使用時の不快症状の解消(5) | |
| 月経カップ使用に伴うメリット | 経済的で日常生活上とても便利(5) 月経に対する興味関心の向上(2) | |
| 繰り返し使用することで体得する簡便性と着脱方法 | 思ったよりも簡単な装着と安楽さ(3) 繰り返しの使用による慣れと着脱方法の獲得(7) | |
| 月経カップの使用に伴う不快感 | カップ着脱時の痛み(7) カップ挿入に伴う違和感(5) カップ着脱の困難感(5) カップ装着や交換にかかる手間と時間(3) | |
| カップの取扱いに関する衛生面での不安と不快感 | カップ取扱い時の手の汚染に伴う抵抗感(4) トイレ内の衛生面での気がかり(2) 汚れたカップの再挿入に対する抵抗感(2) 経血逆流とカップの保管方法に対する不安(2) | |
| 月経カップ使用に伴う心理的抵抗感 | 使用開始当初の緊張感と焦り(5) 膈内挿入への抵抗感と正しい着脱への不安(7) | |

Yumi Itaya, Yoko Furukawa. Ease of use of menstrual cups among Japanese midwives. 31st ICM Triennial Congress, Toronto 2017.

■授乳女性の母乳育児支援に関する研究

- ・ 母乳哺育をする女性の自己効力感尺度の開発 → Paper Published
- ・ 分娩時大量出血をきたした女性の母乳分泌量や乳汁中の鉄含有量は減少するのか？ → 「No」
- ・ 就労しながら乳児を育てる女性の母乳育児支援には何が必要なのか？ → Research Ongoing
- ・ 授乳女性の不快性射乳反射；Dysphoric Milk ejection reflex (D-MER)や、母乳育児（授乳）嫌悪；Breastfeeding/Nursing Aversion and Agitation (BAA)のわが国における実態は？ → Research Ongoing
- * 授乳女性の母乳育児自己効力感を高めるケアを考えると同時に、母乳育児支援に対する助産師自身の自己効力感を高めていく必要もあると考えています。

■助産師のキャリア発達支援に関する研究（他機関共同研究）

- ・ 勤務助産師における就業継続困難感尺度の開発 → Paper Published
- ・ 勤務助産師の就業継続困難感に関連する要因 → Research Ongoing

小・中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 准教授 川端 智子
研究分野 : 小児看護学

概要：未成年の喫煙は法的に禁止されているというだけでなく、医学的・社会的に深刻な問題を引き起こします。未成年の喫煙行動は、友人、親、兄姉、教師などの喫煙と密接な関係があるという結果が示されています。そのため、未成年へのタバコに関する教育が必要であるとともに、子どものモデルとなる家族に対しても同様に教育することが必要不可欠です。今まで未成年に対する様々な防煙教育プログラムが実施されてきましたが、子どもが親の喫煙に対する態度や考え方に影響を受けるという点に着目したものはありません。喫煙および受動喫煙防止教育活動を通して、親子がタバコに関する正しい認識を持ち続けることを目指しています。

また、近年においては喫煙開始年齢の低年齢化が問題となっており、低年齢化に影響する要因解明も行っています。

■小中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育の実践

教育プログラムには、基本的な喫煙に関する知識を伝えるだけでなく、自分が喫煙するという行動に対してどのように向き合うか、誘われた時にどのように断るかについてなど、ロールプレイを用いて、自己効力感を高める教育を行っています。

また、喫煙だけでなく、受動喫煙からどのように身を守るのかという点も重要な教育です。自分の身を守るためにどのような行動をとる必要があるかについて考えられることを目標に教育しています。



■保護者への喫煙および受動喫煙防止教育の実践

保護者へは、参観を利用し学校と協働し教育を行っています。

■喫煙開始年齢の低年齢化の要因の解明

構造方程式モデリングの手法を用いて因果モデルを作成しています。喫煙開始年齢を低年齢化させないためには、喫煙に関する知識の増大だけでは不十分であり、親や社会が子どもの喫煙に注意を払い、子どもの喫煙に対して介入していくことが重要であることが解明されました。

自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に進めるためのケアガイドの開発

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 玉川 あゆみ
研究分野 : 小児看護学、地域看護学、家族看護学

自閉スペクトラム障害をもつ子ども（以下、ASD児）は、医療受診に対する困難がある場合があります。特に感覚過敏がある場合、感覚器の診療を行う耳鼻咽喉科への受診では困難が大きいと言われてしています。そのため、ASD児の耳鼻咽喉科診療における問題と支援を明らかにし、診療を円滑に進めるためのケアガイドの開発を目指しています。

■自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療における問題と支援の明確化

耳鼻咽喉科診療でASD児が抱える問題と支援について、ASD児の耳鼻咽喉科診療に携わっている医療関係者に面接調査を行いました。その結果、医療関係者は、ASD児と親が耳鼻咽喉科診療に対するネガティブな体験による心的負担を抱えていることを理解する必要があることが明らかになりました。その上で、ASD児と親との関係性を積極的に築き、ASD児が主体的に診療に臨めるよう支援する必要性が示唆されました。

■自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に進めるためのケアガイドの作成

文献検討や面接調査結果を踏まえて、「耳鼻咽喉科受診が苦手な自閉スペクトラム症児の診療をスムーズに進めるためのケアガイド」を作成しました。ケアガイドは、第Ⅰ部：子どもの障害特性の理解、第Ⅱ部：子どもと親への基本的な関わり方、第Ⅲ部：診療の進め方で構成しました。今後は、臨床現場において医療関係者にケアガイドを実際に使用してもらい、臨床での適用可能性を評価していきます。また、ケアガイドの活用の幅を広げていくために、アプリ等のデジタルコンテンツの開発を目指しています。

| 項目 | 確認事項 |
|---|--|
| <p>気が紛れている間に処置をする</p> <ul style="list-style-type: none"> 動くとき危ないことを再度説明し、診察中に気が紛れるようポジショニングを指示しながら声をかける。 必要時、保護者の抱っこや、医療関係者による頭部の固定をおこなう。 <p><ポジショニングの例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・右耳を診察時は「左手を高くあげて」と指示を出す（あるいは絵・写真カードを示す）。 <p>診察中は「手をあげてね」「天井にさわられるようにあげてね。もっともっとながめるかな？もうちょっと伸ばして伸ばして」等と声をかけて手をあげることに集中させる。</p>  <p>手を空高くあげる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鼻や喉の診察時、またはスワブの検査の時は、「目は空のほうをよく見て、手はパーにして空に向けて膝の上においてね」と指示を出す（あるいは絵・写真カードを示す）。 <p>「手は空向いている？ちょっと気持ち悪いけど、お空に向けてね」等と声をかけ、動作に集中してもらう。</p>  <p>手を空に向けて口をあける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集中できるものを見せる <p><具体例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・画面モニターで耳の中を見てもらい、確認しながら進める ・子どもの興味のあるDVDやゲームを見せる ・小さめの玩具やキーホルダーをポケットに忍ばせておいて、タイミングを見て出すことで気を引く <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが日常で大切にしているものを持参してもらい、それらを用いて気を紛らわせる <p><具体例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぬいぐるみやタオル等 ・iPad等 | <p>Point</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもに触れるときは指先で触れず、手のひらを用いて面で触れる。 <p>注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不意に手が動きそうな時は「握手しようか」といって、手を握らせてもらう。力をいれず、痛みがないように握る。 <p>Point</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動きがあるおもちゃによく集中することができる。 <p>Point</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大切にしているぬいぐるみ等は、子どもの安心材料にもなる。 |

耳鼻咽喉科受診が苦手な自閉スペクトラム症児の診療をスムーズに進めるためのケアガイドの一例

フェムテックを活用した就労女性の健康支援に関する研究



人間看護学部 人間看護学科 講師 松原 千晴
研究分野 : 生涯発達看護学 助産学

女性の健康への取り組みは、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ推進の観点に加えて、社会経済的な損失の抑制という観点からも重要です。就労女性自身が、生涯にわたりwell-beingを高められる包括的な支援を探求しています。

■就労女性の包括的健康支援システムの構築に関する研究

・近年、少子高齢化により将来的な労働力不足が懸念されていることを背景に、働く女性の活躍への期待はますます高まっています。一方で、女性は、ライフステージごとに様々な健康課題を抱えています。性成熟期の女性では、女性特有の疾患・症状である月経随伴症状、月経困難症など月経に関連した健康問題が散在しています。これらの健康問題は、日常生活の負担も大きく、労働生産性や就業継続への影響もあるため、見過ごすことのできない課題と考えられます。

ここ数年、ICT（情報通信技術）の活用が広がりを見せており、様々な就労環境におかれる女性に対して包括的な支援が行えるようにICTを用いた健康教育プログラムの開発に取り組んでいます。

今後も、社会における女性の活躍推進に関わる健康課題に対して、包括的な健康支援システムを構築するという視点から問題解決を目指した研究に取り組んでいきます。

産後の母子への支援に関する研究

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 渡邊 友美子
研究分野 : 生涯発達看護学

概要: 産後の女性と家族が、健康に子育てをすることができる、
全ての人々が子どもを育てることが心から楽しいと思えるような社会を目指して、
できることから少しずつを目標に研究に取り組んでいます。

現在は、この課題に取り組んでいます

■ マルトリートメント予防に向けた支援ガイドの開発

マルトリートメントは、子どもの発達・発育を阻害する要因となるばかりでなく、身体的健康被害、心理的・社会的健康問題のリスクを上昇させます。また、被虐待児として育った親は、自分の子どもを虐待するという虐待の世代間連鎖を引き起こすとされていて、日本の母子保健上の最優先すべき社会問題です。マルトリートメント未然に防ぐ支援は、産後の母子が健やかに生活を送るために取り組む課題の1つと考えます。

産科医療機関での1か月健診時に実施するマルトリートメント予防のための看護職者用ガイドを作成

産科医療機関での1か月健診時に実施するマルトリートメント予防のための支援プログラムの実施と効果の検証に発展



マルトリートメントとは？

子どもを育てる養育者からの、「身体的虐待」「性的虐待」だけではなく「ネグレクト」「心理的虐待」を包括した内容で、子どもへの発達を阻害する行為全般を含めた「不適切な関わり」のことをいいます。

地域在住高齢者の肺炎予防

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 岡本 紀子

研究分野：高齢看護学、地域看護学

概要：

肺炎は我が国の死因の第5位、誤嚥性肺炎は第7位で、合わせると第3位の多さとなります。そして、肺炎に罹患する方の多くは高齢者です。

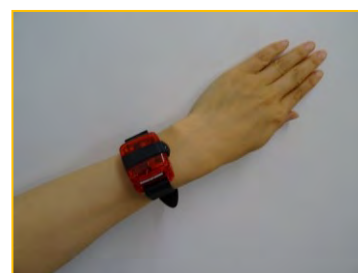
加齢とともに免疫機能や嚥下機能が低下し、肺炎に罹患しやすく治癒しにくくなります。しかし、日常生活に目を向けると、社会的な交流を図ることでよく眠れたり、夜間の睡眠の質を高めることで免疫機能への効果も期待されます。

そこで、食べる、眠る、活動する（身体を動かしたり人と関わったりする）といった日常の営みや歯磨きなど、高齢者にとって無理のない肺炎予防のためのセルフケアを提案したいと考えています。

■加齢と睡眠の質

加齢に伴い睡眠の質は低下します。具体的には、寝付くまでに時間がかかる、途中で目が覚める、朝早く目が覚める、ぐっすり眠った感じがしない、といったことが生じます。

そこで、高齢者の方に右の図のように手首に機器を装着してもらい睡眠時間や活動量、照度などを測定して結果をフィードバックしています。



wGT3X-BT (アチカラボ社製, 米国)

■日常の肺炎予防策

肺炎を予防するために、手洗いやマスクの装着等が推奨されています。

これらの実施状況を明らかにするために、高齢の方に日頃実施している方法で手を洗ってもらい、手を洗う前後の掌の細菌を採取すると、手洗い後の細菌数が増加していることもあります。手洗いの所要時間や方法は人によって異なります。その結果を提示すると、手洗いの所要時間は長くなりましたが、手洗い後の細菌数は必ずしも減少しませんでした。

マスクの着脱では、マスクが顔に密着するように装着したり、マスクを外す際に手の汚染を防いだりすることが重要ですが、意識されていないことがあります。そのため、正しい手洗いやマスクの着脱方法の紹介等もしています。

このような研究活動を通して、高齢の方が生活リズムを整え、肺炎や感染症を予防するための行動を効果的に行えるように取り組んでいます。

続発性リンパ浮腫のセルフケア継続支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 准教授 荒川 千登世

研究分野：成人看護学 臨床看護学 看護教育

HP： <http://www.nurse.usp.ac.jp/seijin/>

続発性リンパ浮腫は、乳がんや婦人科がん（子宮・卵巣）などの術後におこり、一度発症すると難治性で、疼痛、関節可動域の制限などによる日常生活動作の困難、仕事の継続困難、服装の変更など、生活全般にわたって支障をきたします。治療としては外科的治療（リンパ管静脈吻合術）と保存的治療（スキンケア・リンパドレナージ・圧迫・運動・日常生活での注意）がありますが、根治的治療法はなく、できるだけ早期にケアをおこなうことや軽減した状態を維持し悪化させないための「セルフケアの継続」が大切になります。セルフケア継続支援として、「浮腫の状態の見える化」「カンタン&効果的なセルフケア」「リンパ浮腫とセルフケアの理解（知識・技術）」などに取り組んでいます。

■ 浮腫の状態の把握

- ☆ 体組成
- ☆ 浮腫評価装置（特許）
- ☆ 周囲径
- ☆ 3Dスキャナー
- ☆ 皮膚の状態のセルフチェック

見える化

■ 浮腫とセルフケアの理解

- ☆ リンパ浮腫外来
- ☆ セミナー
- ☆ パンフレット

知識・技術

QOL
(生活の質)

■ セルフケア

- ☆ 徒手リンパドレナージ
- ☆ 圧迫着衣・ウェア
- ☆ 運動
- ☆ スキンケア
- ☆ 日常生活上の注意

カンタン&効果的

■ 日常生活での工夫・知恵

- ☆ セルフヘルプグループ
- ☆ 服・靴・アクセサリーの工夫
- ☆ 趣味や楽しみの実現

生活を楽しむ

<特許・共同研究等の状況>

浮腫評価装置：特許第5953490号（株式会社タニタ、京都大学、滋賀県立大学）

リンパ浮腫外来、自己管理支援プログラムソフトの開発、圧迫着衣・ウェアの開発、など（京都大学、大阪医科大学、企業など）

健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み



人間看護学部 人間看護学科

講師 岡崎 瑞生

研究分野 : 看護学、老年看護学、生活の質

概要：生命・生活の質や対象者の思いに関する研究、高齢者や障害のある人々の支援につながる研究をしています。対象は、高齢者、障害のある人々、家族などです。

■ダウン症候群のある人の健康管理に関する研究

【背景・目的】我が国における総人口に占める高齢者の割合が急速に増加している中で、障害者の人口構成も高齢化に向かっていく。ダウン症者が地域で健やかに成長し老いを迎えるためには、健康管理の必要性を周囲の人々が認識する事が重要であるが、現状は明らかではない。地域で生活するダウン症者が増加している中で、ダウン症者の健康管理についての現状が明らかになれば、健康寿命延伸の一助になるのではないかと考え、文献調査により、日本におけるダウン症者の健康管理に関する研究の動向を概観した。

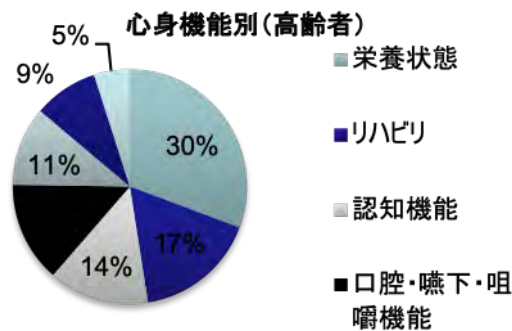
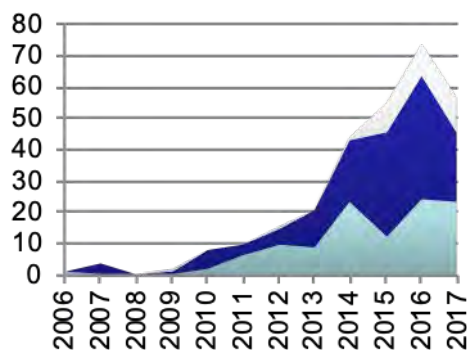
【結果】現在まで13件の原著論文が発表されていた。文献は「知的障害者福祉法（1998）」「健康日本21（2000）」施行後の2000年のものが最も古く、それ以前は特集やレビューであった。

【考察・結論】ダウン症者の健康管理に関する研究は【歯科】に関する研究が多いが、全体として極めて少ない事がわかった。高齢化するダウン症者が地域で健康に生活していくため、老年期を見据えた健康管理に関する研究とそれを後押しする施策が実践されていく事が期待される。

| 対象の年齢層 | 研究の着眼点 |
|--------------|-----------------------------------|
| ・成人期対象 : 5件 | 【歯科】に関する研究 : 6件 (肥満など生活習慣病を含む) |
| ・全年齢層対象 : 4件 | 【健康管理の実態】に関する研究 : 4件 |
| ・家族対象 : 2件 | 【家族支援】に関する研究 : 1件 |
| ・小児期対象 : 1件 | 【言語】に関する研究 : 1件 |
| ・老年期対象 : 1件 | 【療育】に関する研究 : 1件 |

■サルコペニア、フレイルについての研究

日本におけるサルコペニアに関する研究の動向（文献調査）



サルコペニアに関する研究は、近年【疾患別】よりも【心身機能別】が増加傾向にあることが分かった。介護予防に向けてADLの維持・向上のために、生活機能に焦点を当てた研究が増えることが期待されるが、「高齢者」で「運動療法・リハビリ」との関連についての検討が少ない点が課題と考えられた。

■エスノメソロジー（民族看護学的研究方法）を用いた研究

1型糖尿病患者の思春期における心理的体験について、エスノメソロジーを用いて研究した結果、思春期の1型糖尿病患者の体験世界を表す大テーマ「【分からない】事や【めんどくさい】事、【困る】事が多く混在し、【もうしょうがない】と考えないようにしたり、放っておいたり我慢したりしている中で、2型糖尿病とは違う事と経済的負担は【言いたい】事として発信している。」が明らかになり、実践への示唆として、混乱しがちな【分からない】事を整理し、知識に関する事について再確認の場を提供する、認知の発達段階を踏まえた指導・教育方法を用いて認知能力の変化する12歳前後に指導・教育方法を変えて再教育する、思いの表出の仕方を支援し、1型糖尿病について社会的理解を広める事の必要性が得られた。

脳卒中サバイバーのセルフマネジメント尺度の開発

関連するSDGsの国際目標

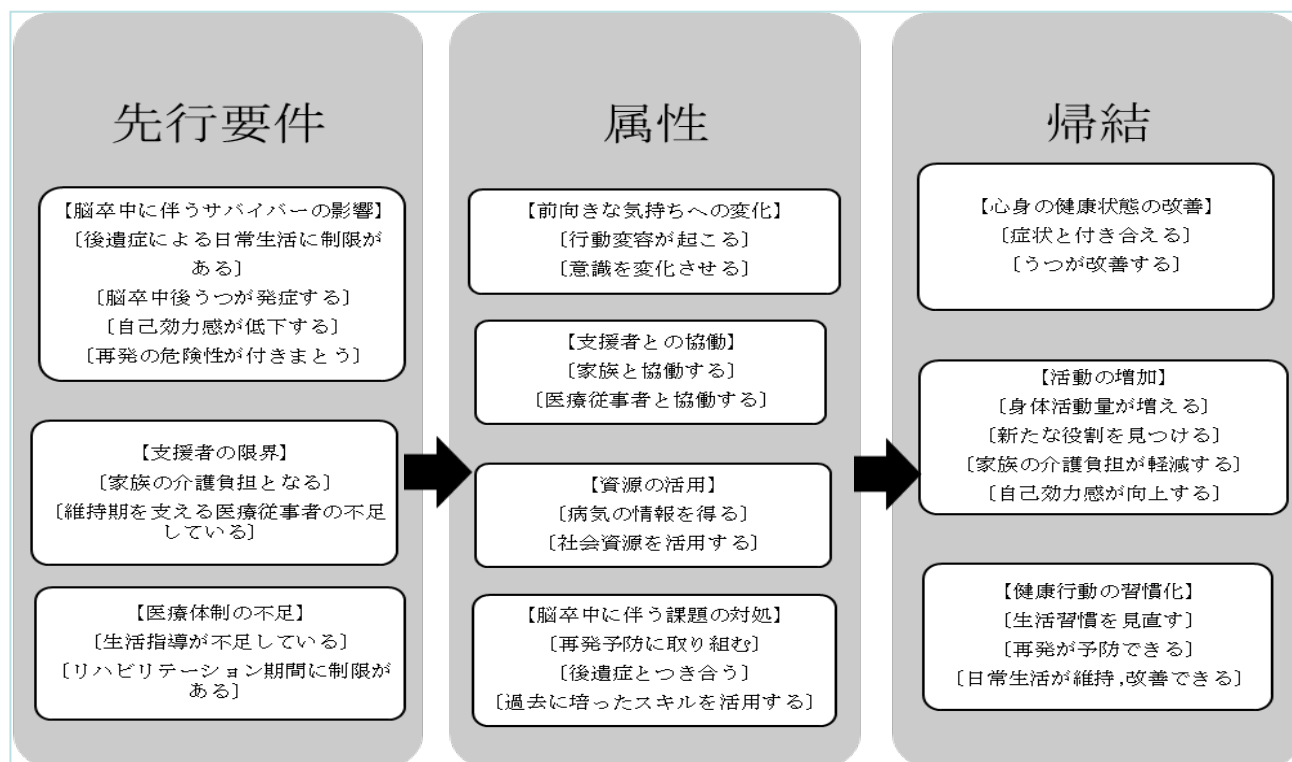


人間看護学部 人間看護学科 講師 片山 将宏
研究分野 : 成人看護学 脳卒中看護 外来看護

脳卒中は、わが国では死亡原因の第4位を占めます。また、介護が必要となる最大の原因でもあります。脳卒中サバイバーとは、①高血圧症、糖尿病などの生活習慣病をもち、脳卒中再発の危険が一生付きまとう、②運動麻痺や失語などの後遺症があり、日常生活に支障をきたす、③支援する医療従事者がほとんどいない、という特徴をもちます。脳卒中サバイバーは、このような特徴から、これまでに大切にしてきた生活や人生を縮小させながら生きていかなければならない状況に追い詰められます。そこで、脳卒中サバイバーが健康でその人らしく生きること、well-beingを目指すことがセルフマネジメントの目標と考えます。現在、「脳卒中サバイバーのセルフマネジメント尺度の開発」に取り組んでいます。

■脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念分析

脳卒中サバイバーは、他の慢性疾患とは違うセルフマネジメントの特徴をもちます。そこで、概念分析を行った結果、脳卒中サバイバーのセルフマネジメントを「脳卒中サバイバーが前向きな気持ちに変化できるように支援者と協働しながら資源を活用し、脳卒中に伴う課題に対処すること」と定義しました。この概念図を基にセルフマネジメント尺度の開発を行っています。



脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念図

フレイル状態にある高齢者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 松井 宏樹
研究分野 : 老年看護学

概要：フレイルとは、要介護状態に至る前段階として位置づけられ、多面的な問題を抱えやすく、健康障害を招きやすい状態とされています。その一方で、フレイルには、適切な介入により再び健常な状態に戻るといった可逆性も示唆されています。つまり、フレイル状態にある高齢者は、健常な状態と要介護状態との狭間の時期にあると言えます。そのため、フレイル状態にある高齢者が自分自身の人生をどのように生きたいか支援していくことは、高齢者の生活の質を高めることにつながると考えています。

■フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けた調査（文献研究）

文献調査の結果より、高齢者がフレイルに該当した場合や体重減少、筋力低下等の身体的変化を本人が自覚した際には、本人の意向を確認し始めるきっかけになると考えられました。一方、フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の内容やそのプロセスについては、さらなる調査が必要であると考えています。

■フレイルという言葉の認知度

フレイルという概念が世間に浸透しているとは言い難く、フレイルと告げられた高齢者であっても、そのリスクや今後の生活への影響を想像することは難しいのではないかと考えています。今後、フレイルという言葉の認知度を高めるための活動や教材の開発等を目指しています。

<論文>

・「意向確認の開始時期およびその内容に関する文献検討-フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けて-」松井宏樹（滋賀県立大学人間看護学部 人間看護学研究（19）11～17 2021年03月）

地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 新井 香奈子
研究分野 : 地域・在宅看護学 老年看護学

地域共生社会の実現を見据え、現在わが国では全世代を対象とした地域包括ケアシステムの構築が急がれています。多様な病気や障害を持ちながら地域で暮らす療養者・家族の支援や支援体制、および看護職の専門性の確立に貢献したいと考えています。

■難病支援終了事例検討会（デスカンファレンス）を土台にしたALS患者支援体制の構築

ALS療養者への難病保健活動（健康福祉事務所）を実施する中で見えてきた課題の解決に向け、平成29（2017）年から健康福祉事務所を実施主体としたデスカンファレンスに助言者として参加しています。事例の全経過を多職種間でポジティブシンキング思考で振り返り、次の支援に生かすことを積み重ねることは、支援者の資質向上や連携強化につながりました。また、このカンファレンスを土台に地域課題および地域の強み抽出に向けた検討を実施し、ALS患者支援体制（レスパイト入院先の確保、在宅での看取りなど）の構築を図っています。

■医療的ケア児の地域支援体制の構築

医療的ケア児の支援者として関わる県と市の保健師が共同で実施した、1）医療的ケア児ニーズ調査、2）医療的ケア児地域資源把握調査に助言者として参加しています。令和2年には、その結果報告の場（保健・医療・福祉・教育・行政他）において、各機関の課題と今後の取り組みについての共有・確認を行いました。この会議の場は、顔の見える関係づくりとA市の医療的ケア時の地域支援体制構築の第一歩につながりました。

■がん患者・家族の意思決定を支える在宅の場の認定看護師による看護相談室の開設

B市内の複数の訪問看護ステーション所属の認定看護師とがん患者・家族に対する看護相談室を地域に開設し、個別相談とグループ相談（サロン）を定期的に行いました。参加者の許可のもと相談内容の分析を行いました。相談に来られた方は、診断後間もない、治療中、治療終了後の訪問看護利用経験のない患者本人や家族でした。この相談室では、相談者が利害関係なく、治療や身体状況、医療者との関係、家族関係など様々な苦悩を認定看護師に安心して話すことのできる場となりました。この話すという行為は、自らの思いの整理と自己決断していくことにつながり、また過去の体験（苦悩）に対するグリーフケアの場ともなりました。認定看護師の看護専門職としての機能の充実につながりました。

■高齢者へのフットケアによる介護予防支援

デイケア利用の高齢者に対し週1回のフットケアとセルフケア指導を行い、足指・爪の状態と自覚症状、運動機能、QOLの視点からの分析を行う調査を実施しました。高齢者の多くに皮膚・爪・足のトラブルが生じていましたが、1回20分の看護師によるフットケアにより、皮膚・爪、循環状態の改善がみられました。また、本人だけでなく家族の「足」への興味が高まり、爪切り方法の改善、靴下・靴の選び方や着用の仕方などのセルフケアの向上につながりました。継続的なフットケアを楽しみに、デイケアを休む回数の減少も見られました。このように、一足飛びに運動機能改善には至りませんが、高齢者の自立支援、介護予防支援につながった支援となっています。

■高齢者の口腔機能向上を促す支援の開発や摂食・嚥下障害者の主介護者に向けた支援

地域で生活する一般高齢者を対象に、口腔機能向上のセルフマネジメント力を高めるプログラムの開発やその効果の分析に関わっています。また、摂食・嚥下障害者の主介護者への訪問看護師による支援についての検討も行い、多職種協働による支援体制の確立や訪問看護師の専門性の確立を図っています。

対人援助関係におけるインボルブメント

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 教授 牧野 耕次
研究分野 : 精神看護学

概要 :

インボルブメントとは、遺伝子や細菌、栄養素、細胞などの実態を伴う物質、もしくは因子や要因など物質を伴わないシステムなど他のシステムと関係を持つ関与の意味で使用されている。本来、2つ以上の変数が関係しあう場合に使用される用語である。

看護では、「巻き込まれ」や「かかわり」「関与」などと訳されているが、インボルブメントは臨床看護師にまで、定着している用語とは言い難い現状がある。看護師が患者とかかわる場合、知らない間に感情的に巻き込まれていることに気づく必要がある。もし気づかなければ、看護師が持つ感情や思考、価値観、責任と、患者が持つ感情や思考、価値観、責任との間で、「押し付け」など、様々な問題が生じる。

精神科の看護師は、知らず知らずに巻き込まれた経験を振り返ることで、かかわり巻き込まれることとはどういうことなのかを実体験から体得（スキルを習得）していることを、私たちは示唆した。さらに、精神科の看護師は、そのふりかえりの経験を活かすことで、意図的にかかわり巻き込まれながら看護していることも示唆してきた。

このインボルブメントは、看護だけのスキルではなく、教員や弁護士などの対人援助職、もしくは子育てや介護などの役割遂行にも応用可能な概念である。コミュニケーション理論は、客観的な枠組みにより、店舗の接客や接遇などのマニュアル的な対応には非常に有効である。しかし、かかわる際に、互いの感情や思考、価値観、責任などがかかわりに反映し、多様で複雑なかかわりが必要な関係性の場合にはマニュアルによる対応には限界がある。そのような場合、インボルブメントは非常に有効な枠組みとなる。

互いの感情や思考、価値観、責任などの境界（バウンダリー）をインボルブメントの中で調整することで、それぞれの納得のできる結果にそれぞれが主体的に導いていく可能性が開かれる。虐待や各種ハラスメント、いじめや孤独など、現代の多くの問題に対するキー概念として、インボルブメントが注目され重要となる時代が必ず来ると思われる。

インボルブメントは、見えない境界（バウンダリー）を自覚するなど意識しながら扱う必要がある。それは、誰もがほとんど無意識に、時に意識して行なっていることである。

今後私たちは、かかわりの中で、誰もが境界を意識し、扱うことができるようになるような研究をしていくことが求められている。

精神科長期入院患者の退院支援に関する継続教育

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 准教授 川田陽子
研究分野 : 精神看護 専門看護師実践

研究者は精神看護専門看護師として、精神科医療の現場で困難患者への看護実践、看護師への教育・相談、倫理調整、多職種連携チームの運営を行ってきました。そのような活動の中で、精神保健医療福祉の最も大きな課題と感じていたのが精神科長期入院患者の存在です。日本の精神科入院患者数は世界一であり、2019年10月には国連・障害者権利委員会から重大な人権侵害であると注意勧告を受けています。これを解消しようと、国の施策によって施設収容型医療から地域医療中心への急な方向転換が図られ、すべての精神科病院で長期入院患者への退院支援が求められることになりました。精神科看護師たちにも看護の方向転換が求められていますが、そのための支援や教育に関する研究は不足しています。精神科医療では今後も長期入院患者の存続が予測されているため、精神科看護師に対する長期入院患者の退院支援に関する教育支援は急務であると考え、研究を続けています。

■精神科病院における退院支援看護実践について

精神科長期入院患者への退院支援における看護実践の内容は、患者の準備状態に応じていくつかの段階に分かれています。段階に応じた看護実践によって、長期入院患者の地域移行が進んでいきますが、段階が進むにつれ、患者の家族からの協力や他職種連携が必要になっていきます。

■精神科看護スペシャリストによる退院支援の実際について

一般の看護師は、退院調整には欠かせない、患者の家族とのかかわりや他職種連携を苦手と感じていることがわかっています。このような中、精神科認定看護師や精神看護専門看護師がリーダーシップをとって、困難患者の退院支援にあたっていますが、その活動はあまり評価されていません。そのような活動を可視化し、一般科と同じような退院調整看護師制度の構築を目指した研究をしています。

■精神科長期入院患者の退院支援に関する看護師向け教育プログラムの構築について

一般科においては、退院支援に特化した教育プログラムの効果が認められ、退院調整看護師の育成も進んでいます。一般科における退院支援とは異なる看護実践が必要となる精神科において、精神科看護師に対する教育プログラムの構築を目指して研究をしています。このような研究を通じて、精神科長期入院患者の地域移行において看護師たちが力を発揮できるように支援してきたいと考えています。

自閉スペクトラム症のある女性が 安心して子どもを育てるための支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 准教授 小林 孝子
研究分野 : 公衆衛生看護学 母子保健

自閉スペクトラム症を含む発達障害が注目され支援制度が整備されてきたのは、1990年代半ばです。その後約30年を経過し、妊娠・出産・育児を経験する発達障害のある女性は増加しています。発達障害のある女性は、妊娠中から出産、育児期にかけて、多くの困難な状況を抱えていることが報告され、心理社会的問題への対応は急務となっています。現在行っている研究では、自閉スペクトラム症に焦点を当て、インタビュー調査を実施しています。自閉スペクトラム症がある女性の経験を基に、専門職や家族の経験知を統合し、支援ニーズを明らかにしていこうと考えています。自閉スペクトラム症のある女性が、安心してその人らしく、妊娠から育児期の生活を送ることができることを目指しています。

■安定した育児につながる要因

自閉スペクトラム症のある母親は、日々の子育てや家事の細かなタスクを、パターン化するという方策で乗り切っていました。しかし、マルチタスクや臨機応変な対応を求められる育児において、パターン化することでうまくいかない場合には、固定されたパターンをはずし、新たなパターンにのりかえる対処を行っていました。また、苦手なところやできないところは全面的に代行してもらうことで円滑な生活を送っていました。さらに、これまでの人生で生きづらさを経験してきたことから、子どもを健全に育てるために努力することや、責められない支援を受けること、マジョリティとは距離を置き仲間とつながる心地よい場をつくりだすことをしていましたが、これらのことは自分自身のためだけでなく、同じ特性をもつ仲間のためにもなされていました。そして、子どもを思いやり、子どもや社会との関係性のなかでの自己をイメージし、子育てのなかで多くの肯定的な経験を重ねていることを明らかにしました。(自閉スペクトラム症の特性がある母親の育児の経験：安定につながる要因の検討, 2022より)

■出産後に子どもをかわいと思えなかった母親が子どもとの間に形成する絆

出産後は複層的な困難な状況と母親役割の負荷が大きく、子どもとの情緒的絆は形成されていませんでした。その後母親役割から解放されることや時間が経過することで、絆が形成されていました。その絆は子どもとの距離があり、標準的な母親像からも離れている独自のものでした。自閉スペクトラム症女性の育児は、ありのまま尊重されるべきであり、多様性が尊重される枠に収まらない支援の提供が望まれることを考察しました。(産後子どもをかわいと思えなかった母親が子どもとの間に形成する絆—自閉スペクトラム症のある女性の語りから—, 2023より)

■子育て中の母親の「安心」とは

安心は子育て中の母親からよく聞かれる言葉です。育児支援施策でも多用され、目指すものとされています。この研究では、子育て中の母親の「安心感」を測定する尺度を開発しました。母親へのインタビュー調査、概念分析、2段階の調査を実施しました。尺度は、3因子「肯定感がある」「おだやかである」「周囲とのつながりがある」の35項目から構成されました。

ひきこもり状態にある人と家族への支援



人間看護学部 人間看護学科 講師 川口 恭子
研究分野 : 公衆衛生看護学、保健師活動
ひきこもり、家族支援

「ひきこもり」の課題については、以前は青年期に焦点をあてた対策が取られていましたが、最近では、ひきこもりの状態にある人の高年齢化や長期化、それに伴う親の高齢化、経済状況の困難化などの課題があることが報告されています。

長期化による二次的影響を防ぎ支援を効果的に行うためにも、早期の相談が望まれます。そのため、適切な時期に相談に至るための支援方法を研究しています。

■ 家族からの相談に関する研究

相談については、ひきこもりという特性から、本人からの相談よりも家族からの相談が多いという傾向があります。家族へのインタビュー調査を通して、家族がどのような経験をして相談に至っているかを研究し、よりよい支援の方法について模索しています。

■ 相談しやすい環境づくりについて

支援を行う際は、本人や家族等からの相談を受けて開始されることがほとんどです。適切な時期に相談につながることで、より効果の高い支援を得ることができます。ひきこもり状態にある人が適切な時期に適切な相談機関につながるができる環境づくりが必要だと考えています。

がん患者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部 人間看護学科 講師 國丸 周平

研究分野 : 在宅看護学、成人看護学、意思決定支援

がんに対する医療技術と治療法の発展により、がん患者の生存率は上昇を続け、患者ががんと共に生活を営む期間も長くなっています。治療方針から療養方法、生き方に至るまで多くの選択を求められるがん患者が、意思決定をすることができる支援について研究しています。

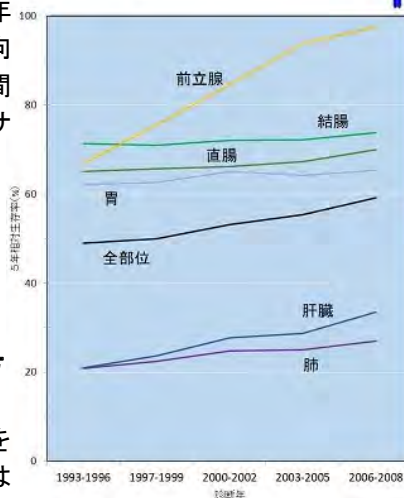
■肺がん患者が治療を緩和ケア中心に変更することを決めるまでの関わり

治癒を目指す治療から緩和ケア中心の医療へと転換する時期にあるがん患者は「生きたい」という希望を持ちながら、治療に対する諦めや死を意識しており、精神的に不安定な状態にあると言われています。そのような状況下でも、がん患者は人生の最終段階の過ごし方に関する意思決定を行わなければなりません。このような時期における意思決定支援の在り方について、早期発見・治療が難しいとされている肺がん患者と看護師との関わりに焦点を当てて研究を進めています。

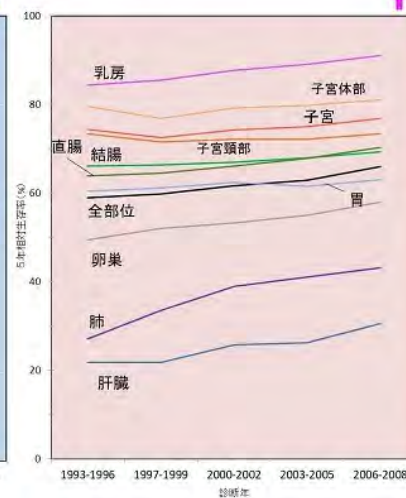
■がんの5年相対生存率

右図は主要部位別に示したがんの5年相対生存率です。多くの部位で上昇傾向にあります。生活をがんと共にする期間が長くなる分、治療や生活に対するサポートが必要になります。

5年相対生存率の推移
(主要部位)
[男 1993年~2008年]



5年相対生存率の推移
(主要部位)
[女 1993年~2008年]



■アドバンスケアプランニングからみる意思決定支援の在り方

自分がどのように生きたいか、最期をどのように過ごしたいかを考えることは病気や障害の有無、年齢にかかわらず全ての人に必要であると言われています。その方が人生を考えることができるよう、話し合い（意思決定支援）を早期から繰り返し行うプロセスをアドバンスケアプランニング（人生会議）といいます。

話し合いが繰り返し行われることで自分自身の人生観を見つめ直すだけでなく、病気や障害により意思表示が出来なくなった後も、希望を理解した家族や医療者がその人に代わって意思決定を行うことができます。これは、がん患者に対しても同様で、がんと診断されたとき、治癒を目指して治療に取り組むとき、治癒が難しいと判断されたとき等、各時期における意思決定支援の在り方を検討する必要があります。

図. 主要部位別、男女別に見たがんの5年相対生存率

国立がん研究センター がん情報サービス
(https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html)より転載

| 学部学科等 | 職名 | 氏名 | 研究分野・キーワード |
|--------------------|-------|--------------------------|---|
| 人間看護学部 | 教授 | 伊丹 君和 | 基礎看護学、基礎看護技術、看護教育、教育工学 |
| | 教授 | 越山 雅文 | 産婦人科学、母性看護・助産、女性の健康・周産期ケア、浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防 |
| | 教授 | 坪井 宏仁 | 心身医学、精神神経免疫学、国際保健 |
| | 教授 | 本田 可奈子 | 救急看護、看護教育、看護管理 |
| | 准教授 | 米田 照美 | 基礎看護学、看護管理学、医療安全教育、危険認知、視線計測、看護者（看護学生・看護師） |
| | 講師 | 関 恵子 | 基礎看護学、基礎看護技術、医療福祉工学 |
| | 講師 | 千田 美紀子 | 基礎看護学、看護教育 |
| | 教授 | 古株 ひろみ | 臨床看護学、小児看護、家族看護 |
| | 教授 | 千葉 陽子 | 生涯発達看護学 助産学 |
| | 准教授 | 板谷 裕美 | 母性看護・助産学、ウイメンズヘルス、助産ケア、母乳育児、助産師のキャリア発達支援 |
| | 准教授 | 川端 智子 | 小児看護、子どもと喫煙、未成年の喫煙防止教育、NICU |
| | 准教授 | 古川 洋子 | 地域看護学、母性看護学、助産学、いのちの教育、産み育て支援、社会的養護 |
| | 講師 | 玉川 あゆみ | 地域看護学、小児看護学、発達障害児の外來受診、家族支援 |
| | 講師 | 松原 千晴 | 生涯発達看護学、助産学、 |
| | 講師 | 渡邊 友美子 | 母性看護学、助産学、生涯発達看護学 |
| | 教授 | 糸島 陽子 | エンドオブライフケア、成人看護学、生命倫理 |
| | 教授 | 岡本 紀子 | 高齢看護学、感染予防、地域看護学 |
| | 教授 | 久保 美紀 | 臨床看護学（成人）、慢性期看護、心疾患看護、セルフケア、コミュニティケア |
| | 准教授 | 荒川 千登世 | 臨床看護学、成人看護学、急性期ケア、回復期ケア、看護教育 |
| | 講師 | 生田 裏里 | 臨床看護学、クリティカルケア看護、成人看護学 |
| | 講師 | 岡崎 瑞生 | 看護学、老年看護学、生活の質 |
| | 講師 | 小野 あゆみ | 成人看護学、慢性期ケア、肝疾患患者の看護 |
| | 講師 | 片山 将宏 | 成人看護学、慢性疾患看護、脳血管障害、外來看護 |
| | 講師 | 喜多下 真里 | 成人看護学、がん看護、緩和ケア |
| | 講師 | 中川 美和 | 成人看護学、慢性期ケア、糖尿病患者の看護 |
| | 講師 | 松井 宏樹 | 老年看護学 |
| | 教授 | 新井 香奈子 | 在宅看護学、老年看護学、地域看護学 |
| | 教授 | 牧野 耕次 | 生涯発達看護学、精神看護学、かかわり、巻き込まれ、involvement |
| | 准教授 | 川田 陽子 | 精神看護、専門看護師実践 |
| | 准教授 | 小林 孝子 | 公衆衛生看護学、母子保健 |
| 准教授 | 馬場 文 | 公衆衛生看護学、児童虐待防止対策 | |
| 准教授 | 森本 安紀 | 在宅看護学、民俗学 | |
| 講師 | 川口 恭子 | 公衆衛生看護学、保健師活動、ひきこもり、家族支援 | |
| 講師 | 國丸 周平 | 在宅看護学、成人看護学、意思決定支援 | |
| 講師 | 下通 友美 | 精神看護学 | |
| 全学共通教育推進機構 | 准教授 | 坂本 輝世 | 外国語教育論、ライティング教育 |
| | 講師 | サンフォ ジャンバティスト | 教育開発、教育品質 |
| | 講師 | 真島 アマンダ | 英語教授法、応用言語学 |
| 地域共生センター | 教授 | 鶴飼 修 | 都市計画・建築計画、地域研究、地域計画、地域活性化、環境共生まちづくり、コミュニティ・ビジネス |
| | 講師 | 上田 洋平 | 地域学、地域文化学 |
| 地域ひと・モノ・未来情報研究センター | センター長 | 酒井 道（兼務） | メタマテリアル科学、プラズマ理工学 |
| | 准教授 | 杉山 裕介 | 偏微分方程式 |

※詳しい研究者情報は、ホームページ (<http://db.spins.usp.ac.jp/>) をご覧ください。